7月30日（木曜日）「祝福を試してみよ」

【新改訳 2017】

マラキ書　3•1－12

「‥‥‥わたしのところに帰れ。‥‥‥十分の一をことごとく、宝物倉に携えて来て、わたしの家の食物とせよ。こうしてわたしをためしてみよ。‥‥‥天の窓を開き、あふれるばかりに祝福をあなたがたに注ぐかどうかをためしてみよ。」（7－10節）

「神（また神の祝福）をためす」とはなんということでしょう。聖書の他の箇所には神を試してはならないと言われています（申命6•16）なのに、「ためしてみよ」と言われています。

十分の一のささげものは、すでにアラブハムも実行し（創世14•20）、モーセは規定の中に入れました（申命 14•22-25）。でも、このころは守られていませんでしたので、マラキは神のものを盗む行為だと断罪し再開を勧めました。十分の一のささげものは、神を万物の主とあがめ、その十分の一を主にお返しし、感謝と献身を表すものでした。今日、「福音」のゆえに、それはもはや規定ではありません。しかし、今、律法ではなくても、主のすばらしい祝福が約束されていることには変わりありま

せん。そのことは、主も示唆されています（マタイ 23•23）。

～祈り～

主よ。あなたにおささげできることをうれしく思います。「律法」にまさる「福音」のゆえに、喜んで、十分の一をささげ続ける者であらせてください。

【学びのために】

マタイ 23•23 ほかによれば、主イエスは、パリサイ人たちの形式的な 10 分の 1 のささげものなどを批判されましたが、同時に、それをもおろそかにしてはいけないと言われています。問題は、彼らが律法の心（スピリット）をおろそかにしていたことでした。